

太田孫左衛門の子。芳春院夫人の外甥で、前田利長と従兄弟であった。天正十五年二月豊前巖石城の戦に利長に従ひ、奮戦最も功があつた。政春古兵談には、前田方の一番乗は太田喜藤次と松平久兵衛(康定)であつたと蒲生氏郷方の記録にあると載せる。十八年又八王子城の攻撃に加り、慶長二年九月但馬守に任ぜられ、五年の役には先鋒の將となり、其の後大聖寺城の留守となつたが、七年五月四日利長は、横山長知に命じて、太田長知を金澤城中に斬殺せしめた。横山の太田を討たんとした時、太田は刀を抜いて横山を突いたが、懐中の鏡の中つて傷つけられず、横山即ち再び打つて太田を斃した。利長も亦横山を助けんとし、自ら手鎗を携へて場に臨んだ。次いで利長は、淺野將監を遣はして、太田の守備した大聖寺城を攻めしめたが、太田の臣吉田茂右衛門・鹿内木工之を拒み、利長の親書を得るに及んで漸く命を奉じた。後横山長秀・津田重久をこゝに居らしめ、太田の遺領一萬五千石は横山に加賜せられた。太田の戮せられた理由は明らかでない。因にいふ。太田も横山も共に諱を同じくしてゐたことは確實であるが、但馬長行としたものもある。初諱でもあらうか。

と申所有之候。是も頼朝公より俱利伽羅宮附狀に有之大谷のよし申傳候。」と解して居る。しかし建久の下文といふものは、その體を得ぬから偽作であらう。

**オホタニ** 大谷 珠洲郡西海郷に屬する部落。能登名跡志に、『大谷。片岩より一里三町。家數二百軒許り。近郷の大村也。此村は昔平大納言時忠卿の左遷の地にて、その舊跡色々あり云々。則時忠卿の子孫とて、則定惣左衛門といふ一軒百姓、館跡にあり。家後に時忠卿の古塚あり云々。又此村に此卿の筋目とて、實名を家名に呼ぶ者十二人あり。頼兼・頼光・頼政・兼政・政頼・友安・友吉・助友・吉盛・國吉・助光・則定、是を大谷の十二名といふ。中にも頼兼は山廻役にて、利家公の御墨付・御扶持を頂戴あり。』とあり、又文化十四年郡方書上には、『大谷村より半道程山の奥に館跡有之、平大納言時忠卿の御座所と申傳候。且子孫と申傳、此所に居住仕候百姓有之候。』と記する。時忠の塚といふものは確實でない。

**オホタニシラヤマジンジヤ** 大谷白山神社 珠洲郡大谷に鎮座し、今は白山神社と稱する。式内等舊社記に、『大谷白山神社。西海郷大谷村鎮座。舊社也。』とある。

**オホタニタウケ** 大谷峠 珠洲郡内山小字通傳から、大谷小字則貞へ越える峠。

**オホタニツカ** 大谷塚 羽咋郡羽咋にある古墳で、もと本念寺の境内に屬して居た。大正六年九月石城別王の御墓と治定せられた。

**オホタニヨリカネ** 大谷の頼兼 ↓ヨリカネ 頼兼。

**オホタハラ** 大田原 鳳至郡山田郷に屬する部落。

**オホダヒラ** 大平 オウ 鳳至郡四位内の小字。

**オホダヒラ** 大平 オウ 鳳至郡藤瀬内の小字。

**オホタミノリ** 太田美農里 諱は眞章。幼名莊藏、後良策・登・美農里と改め、雪嶽を號とした。天保十二年金澤に生まる。父耕民醫を以て老臣村井氏に仕へ、美農里を關醫黒川良安に託した。時に年十五。次いで嘉永三年大坂に遊びて緒方洪庵の門に入り、遂に塾頭に進んだ。六年米艦渡來の事あるや江戸に赴き、蘭式兵學者手塚律藏の家に寓し、造船術と兵學を學んだが、脚疾を得て歸國した。安政四年藩命を以て蘭書翻譯校正方となり、文久二年軍艦方御用を兼ね、慶應二年壯猶館醫學教授に任じ、翌三年卯辰山養生所が起つてから後、藩及び縣の醫務に盡す所が多く、明治二十九年四月功を以て勅定の藍綬褒章を賜はり、四十二年十月齡七十九を以て歿した。

**オホタミノリ** 太田美農里 諱は眞章。幼名莊藏、後良策・登・美農里と改め、雪嶽を號とした。天保十二年金澤に生まる。父耕民醫を以て老臣村井氏に仕へ、美農里を關醫黒川良安に託した。時に年十五。次いで嘉永三年大坂に遊びて緒方洪庵の門に入り、遂に塾頭に進んだ。六年米艦渡來の事あるや江戸に赴き、蘭式兵學者手塚律藏の家に寓し、造船術と兵學を學んだが、脚疾を得て歸國した。安政四年藩命を以て蘭書翻譯校正方となり、文久二年軍艦方御用を兼ね、慶應二年壯猶館醫學教授に任じ、翌三年卯辰山養生所が起つてから後、藩及び縣の醫務に盡す所が多く、明治二十九年四月功を以て勅定の藍綬褒章を賜はり、四十二年十月齡七十九を以て歿した。

**オホタモリカツ** 大田盛一 通稱雄五郎。忠兵衛・數馬・小助・小又助。寛政三年養父彌兵衛忠明の遺知百八十石を受け、七年御供役から次第に昇進し、御先弓頭に至り、文政二年三月職を除いて遠慮を命ぜられたが、七年二月御小將頭に復し、天保元年四月百二十石を加へ、御馬廻頭・定番頭等となつた。

**オホタモリカツ** 大田盛一 通稱雄五郎。忠兵衛・數馬・小助・小又助。寛政三年養父彌兵衛忠明の遺知百八十石を受け、七年御供役から次第に昇進し、御先弓頭に至り、文政二年三月職を除いて遠慮を命ぜられたが、七年二月御小將頭に復し、天保元年四月百二十石を加へ、御馬廻頭・定番頭等となつた。

**オホタランコウ** 大田蘭香 名は晋、字は景昭、蘭香はその號で、元貞の女である。寛

治二十九年四月功を以て勅定の藍綬褒章を賜はり、四十二年十月齡七十九を以て歿した。美農里初め漢籍を明倫堂の學士渡邊栗及び長井平吉に受け、好んで詩を作つた。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

**オホタニシラヤマジンジヤ** 大谷白山神社 珠洲郡大谷に鎮座し、今は白山神社と稱する。式内等舊社記に、『大谷白山神社。西海郷大谷村鎮座。舊社也。』とある。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

**オホタニタウケ** 大谷峠 珠洲郡内山小字通傳から、大谷小字則貞へ越える峠。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

**オホタニツカ** 大谷塚 羽咋郡羽咋にある古墳で、もと本念寺の境内に屬して居た。大正六年九月石城別王の御墓と治定せられた。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

**オホタニヨリカネ** 大谷の頼兼 ↓ヨリカネ 頼兼。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

**オホタハラ** 大田原 鳳至郡山田郷に屬する部落。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

**オホダヒラ** 大平 オウ 鳳至郡四位内の小字。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

**オホタミノリ** 太田美農里 諱は眞章。幼名莊藏、後良策・登・美農里と改め、雪嶽を號とした。天保十二年金澤に生まる。父耕民醫を以て老臣村井氏に仕へ、美農里を關醫黒川良安に託した。時に年十五。次いで嘉永三年大坂に遊びて緒方洪庵の門に入り、遂に塾頭に進んだ。六年米艦渡來の事あるや江戸に赴き、蘭式兵學者手塚律藏の家に寓し、造船術と兵學を學んだが、脚疾を得て歸國した。安政四年藩命を以て蘭書翻譯校正方となり、文久二年軍艦方御用を兼ね、慶應二年壯猶館醫學教授に任じ、翌三年卯辰山養生所が起つてから後、藩及び縣の醫務に盡す所が多く、明治二十九年四月功を以て勅定の藍綬褒章を賜はり、四十二年十月齡七十九を以て歿した。

**オホタモトサダ** 大田元貞 通稱乙之助。忠藏・才佐、字は公幹、錦城と號した。大聖寺侯の侍醫榎田玄覺の七男で、順格の弟である。天明十三年元貞十九歳にして、越前府中の市醫縣道策の家に養はれたが、翌年離別して江戸に上り、儒を山本北山に學んだ。既にして元貞生徒に教へ、錦城雜錄・飛耳張日編等を著して名聲忽ち揚つた。水戸侯之を聞いて聘せんとしたが、沮むものがあつて果さなかつた。後吉田侯等を厚くして之を招き、世子の爲に書を講ぜしめた。文政三年元貞暇を請ひて京師に遊んだが、摺紳學士皆敬服せざるはなかつた。是に於いて加賀藩主前田齊廣は、錦城が封外の賓師たるを惜しみ、遂に吉田侯に請ひ、五年八月十四日祿二百石を賜うて頭並に班せしめ、別に役料百石を與へた。八年四月二十三日江戸に歿。享年六十一、谷中一乘院に葬る。疑問錄・九經談・大學原解・中庸原解・樞憲漫筆・春草堂集等の著書甚だ多い。

# オホ